

認知症の早期診断と治療

東毛敬愛病院 院長
 穎原 禎人 先生

誤解している人も多いのですが、認知症は脳の病気です。年を取れば誰でもなるものではありません。統計では、85歳以上でも4人に3人は認知症ではありません。一方で認知症の患者さんは、とても多いことも事実です。急激に高齢化が進む日本では現在240万人の認知症の患者さんがいますし、2025年（平成37年）には330万人へ増加するだろうといわれています。

認知症は病気ですから治療があります。多くの人は認知症は治らない、と考えているようですが、代表的な認知症であるアルツハイマー病は早期であれば薬によって進行を抑える効果があります。また、正常圧水頭症や慢性硬膜下血腫、ホルモンの病気などで認知症が認められることもあり、これらの疾患は適切な治療によって改善するので「治療可能な認知症」と呼ばれています。「もの忘れは年なのではない」と諦めるよりも早期診断・早期治療がとても重要です。

さらに、認知症を早期に診断することで本人の意志決定ができることや、家族にとっても介護に余裕が生まれることが重要です。介護は長期戦です。準備や計画に時間がかけるのは大切なことです。

同じく認知症は予防も知られています。高血圧や糖尿病を持つ人は認知症になりやすいといわれています。コレステロール値を上げないように魚中心のタンパク質摂取を心掛け、適度な運動をすることが認知症予防に効果的だと報告されています。趣味や友人を持って、生き生きと社会生活を営むことが予防につながります。

認知症は進行すると、物忘れなどの症状以外に興奮や徘徊、何事にも意欲をなくしてしまふといった症状が認められます。これらを「認知症高齢者の行動・心理症状」と言います。これらの症状に対しても適切な対応や薬物を使用することで、家族や施設での介護がぐっと楽になることが知られています。お困りであれば、ぜひ専門医に相談してみてください。